

# 多摩JCGO問題を巡って

村越 真

1月21日、多摩OL主催のジュニアチャンピオン大会で「あつてはならない」ことが起こった。参加者が帰りに民家にごみを捨てていったのだ。この顛末は同クラブの菅原氏によってメールへ流され、そこから活発な議論が生まれた。これからも起こるかもしれない、ごみ問題にどう対処していけばいいのか？

## 「あつてはならないこと」が起こった

多摩OLのジュニアチャンピオン大会の当日（1月21日）表彰式も終わった会場の体育館に、「その駐在だけど」とお巡りさんが現れた。

「なんでも、民家の敷地内に「人目をはばかるように」ゴミを捨てていった者がいるとのことで、たまたま近所に居合わせた無関係な若者クンを連行してきたようです。「いったいおたくはどんな指導をしているんだ」と散々お小言を頂戴してしまいました。ひたすら頭を下げ続けるしかありませんでした。関係のない若者クンにも申し訳なかったです。白い袋に入った「ゴミ」の中身は、汚れたシューズと靴下でした。怒りを通り越して情けなさでもう何も言えません。」と実行委員長の菅原氏は当日の気持ちを語る。

同じ1月に、全国で成人式における若者のモラルが問題になっていた。そんなモラルの崩壊がオリエンテーリングの世界にも広がっているのか、と菅原氏は危惧する。小学校から学級崩壊が起こり、電車の中でのジコチューな行動が問題になる時代である。オリエンテーリングだけがモラルの崩壊を免れているとは、もはや言えないようである。この「モラ

ルの崩壊」は菅原氏の手でオリエンティアのメーリングリストに流され、徐々にホットな議論が展開された。

## ごみ問題にどう対応すべきか？

京葉OLの藤沢氏は、捨てた人をかばうつもりはないが、と前置きしつつ、「世の中にゴミを捨てる人間はゴマンといえます。オリエンティアだけが聖人君子の集まりである必然性もなく、今までそういう問題が起きなかったのが幸せだったのではないのでしょうか。参加者がゴミを持ち帰るというのも一つの方法ですが、会場に大きなゴミ箱（あくまで例えです）を設けて、われわれ参加者はその経費を負担する、というも、地域に対する責任という意味では必要なんじゃないかと思えます。」という現実的な対応の必要性を主張する。

ごみに悩む観光地や山では、ごみ箱をおかず「ごみは持ち帰りましょう」キャンペーンを張るところが多い。オリエンテーリングの大会会場でもそういうところは少なくない。だが、ごみ問題はモラルに訴えるだけでは解決できないことを示している。そして、今回はそれが顕在化した事件と言えるだろう。多摩の菅原氏や高橋氏は、モラルの向上を訴えるよう行動すべきだという点を強調する。

サンスーシの西山氏も、同じような立場から、たとえば次のような警告がプログラムに必要な時代になっているのかもしれないと言う。

「オリエンテーリングは地元の皆さんの協力なしには成り立たないスポーツです。参加者の一人でも地元の人に損害を与えたり迷惑行為があると、そのためにこの地域でのオリエンテーリングが出来なくなることもあります。」・・・という事を理解されている大多数の皆さま

は以下の警告を読む必要はありません。

### 【警告】

参加者が地元関係者に損害を与えたり、迷惑行為があった場合、主催者はその状況を調査し、該当参加者の氏名公表、地元への謝罪要求、賠償請求をすることがあります。何が迷惑行為なのか？それは自分が相手の立場だったらどう思うかを考えてご自身で判断して下さい。

## 北風は太陽に勝てたか？

保健衛生の専門家である東大OLKの安保氏は、次のような興味ある事例を紹介している。アメリカでは年間3万人以上もの生まれたばかりの乳児置き去りが発生している。当然アメリカでも、乳児の置き去りは「保護責任者なにかか罪」や場合によっては「殺人(未遂)罪」によって起訴されるので、置き去りにする親たちはその事件の発覚をおそれ、山奥や砂漠などの人目に付かない場所で、乳児を置き去りにする。そのため、置き去りにされた乳児のほとんどが命を落としていた。特に置き去り事件の多いフロリダ州では、この問題を重く見て、以下のような州条例を制定した。すなわち、「教会・病院・市役所の専用ボックスに乳児を置き去りにした場合、その乳児の母親の身元が発覚しても、母親を罪に問わない」。もちろん、この条例を制定するまでには、人権団体から強い反対があった。「フロリダ州は、乳児の置き去りを容認するのか！」「母親が親権を放棄するのを認めているのか！」と。しかし、乳児の命を目の前にして、四の五の言っていられず、その条例は施行された。そして、乳児の置き去り死亡事件は激減した。しかし、興味深いのはその後である。施設への置き去りも含めた、置き去り件数そのものが減ったという。なぜか？それを理解する鍵は、次のような母親のコメントに現れている。「教会の専用ボッ

クスに乳児をおいてきたが、この重大さに気づいて翌日引き取りに戻った」この動きを見て、周囲の州でも続々とその条例を制定している。現在は50州のうち17州ほどでこのような条例が存在するのだそうだ。

そして安保氏は、「古来北風が太陽に勝った例はない」と結ぶ。

もちろん、乳児の置き去りとごみ放置を同一に論じることはできない。結果の重大性は全く異なるし、置き去るものに対する本来ならあるだろう愛着の程度もはるかに違いがある。しかし、人間がどんな時に自分の行動に責任を感じるのかという行動原理の点ではごみ問題に対処する上で参考になる考え方が含まれているのではないだろうか。

私のそばにいる社会心理学者はいう。「自分の周りから喫煙に関する道具やたばこを排除するという禁煙プログラムは成功しない。それは自分が環境にコントロールされていると潜在的に考えてしまうからだ。それよりも自由にたばこを吸える環境にして、いつでも吸えるんだという禁煙方法の方が成功する。私はそれでたばこを止めた」と。つまり自己の納得や責任感を感じさせる行動のほうに継続力を持っているのだ。

## マイナスをプラスに

トータスの白戸氏は、「実際に起きたことに実際的に対処する」ことの重要性を説く。そして、サッカーのサポーターの例を挙げながら、そんな負の出来事もプラスに替えてしまうことができるのだという。

現在サッカーのサポーターたちは、発煙筒をたいても、けんかをして試合が終わればゴール裏のごみを持参のビニール袋に入れて持ち帰る。彼らが特にモラルの高い人たちでもなければ、低い人たちでもない。そんな習慣が生まれたのは1993年の春だと白戸氏は紹介する。

「その時まだ中学生だったあるサポーターは、バックスタンドに陣取る韓国サポーターの姿を見て「選手だけでなく、自分たちも完敗だ」と思ったそうです。1万人を超える韓国サポーターは、憎き日

本の地で、勝利に酔いながらも悪態もつかず、暴れもせず、ゴミを拾っていたのです。」リーグが発足し、W杯を目指すには、サポーターも世界に追いつかなければいけない、との雰囲気醸成されました。その道具の一つに使ったのがゴミ拾いでした。もちろん、対野球という意味で、いかに自分たちをメディアにプレゼンしていくか、という狙いが根底にはあったでしょう。」

こうしてサッカーでは、ごみを捨てて散らかすという負の行為から、それを拾うことがかっこいいというプラスの行為が生み出されてしまったのだ。「警告」によってやらされるよりは、確かに納得づくで自分の意志でやるほうが「かっこいい」し、それ自体アピールになる。

## 危機管理の必要性

日ごろから、日本のオリエンテーリングの規則はちやちだと言う利光氏は、イギリスのガイドラインにはこうしたごみ問題に対処すること細かな条項があると指摘する。その中には、張り付け式の位置説明が落ちやすいことや、それが非オリエンティアに拾われることでオリエンテーリング全体が危機に陥る可能性があることさえ書かれている。環境に対する意識もさることながら、ごみ問題の発生を具体的に捉えている危機管理意識には学ぶべきものがある。ごみ問題は現実には起きているのだ。そしてそれは主催者のコントロールを超えた場所にさえ及んでいる。モラル向上を訴えることも必要だが、現実には起こりうる危機に対してどう取り組むか、つまり危機管理の発想が重要なのである。

やはり多摩OLの大田氏は次のように書いた。「マナーとかモラルの問題で精神論や教育論も必要ですし、こういうのを良い機会として我々がもう一度考え直すことも重要ですが、それだけでは片手落ちで、参加者の多様性と教育(指導)の限界を考慮してフェイルセーフ(何かが起こってしまった時の対応策)も考えておく必要があると思います。」

しかし、大田氏は単純にごみ箱を設置するのではなく、次のような方法がより本質的なフェイルセーフなのではない

かと提案する。

「一方的に私有地を借りてます感謝してます」の関係から一步進んで、「町内施設・会に地図売上代金から些少ですが寄付させていただきます。ODAみたいで感謝されないというなら「地元の川の清掃に毎年参加します・テレインの掃除毎年してます・会館の大掃除に遠方よりかけつけます」の関係にまでしておく、ということ。確かにコストはかかるけれども、そこが本当にクラブやOL界にとって貴重な場所であるなら、そのくらいのはやる価値があるでしょう。既にこれに近いことをやっているクラブもあるでしょう。僕の知ってる話でも、常磐インカレでは「田植え」に誘われていたし、倉瀬とOLK-OBの関係も宿泊させてもらうほど良いと聞いた覚えがあります。こういう場所では万が一不届き者がいても、使用禁止になる確率は低いと思うのです。」

大田氏が指摘するように、東大OLKでは何度か大会を開いている倉瀬村と非常に良好な関係を保っている。それは氏が指摘するように、運営にあたったOBが大会運営以外にも倉瀬村との関係を築いているからである。

福島の安田氏も、参加者を「罪人にしない」という視点からも、適切なリスク管理がなされ、また参加者も応分の負担をすべきだと主張する。どんなにモラルをといても安きに流れる人はいるわけだし、そういう行為がおこれば、主催者が地権者に対して信頼を失うことに代わりはないからだ。

## ごみ問題に学ぶ

ごみ問題は私たちにオリエンテーリングにとっても無視できない問題である。(35pに右に続く)